

「権狐」という標題について

— 少年南吉の意図 —

柴田哲谷

About the notation of the title called "Gongitsune 権狐"

— Nankichi intention of Youth —

Tetsuya Shibata

キーワード：「権」 meaning of Gon, 自己意識 self-consciousness, 志 wishes, 不遇 unfortunate, 象徴 symbol

1 はじめに

新美南吉の『ごんぎつね』は、名作という評価が定着し、小学4年の教科書にも採られて人口に膾炙している。この作品は、南吉が雑誌「赤い鳥」に投稿し、主宰者鈴木三重吉が斧鉞を加えて成ったものである。南吉の草稿は、彼の「スパルタノート」に「権狐」と題して記されているが、これが投稿された原稿であるのかは判然としないし、南吉と三重吉の間でどのようなやりとりが交わされたのかもわからない。しかし、「草稿」は完結した「作品」であり、まぎれもなく十代後半の南吉の表出である。

標題の由来について南吉は語っていないが、下に紹介する2説が知られていて、何れも説得力がある。「ゴンギツネ」という響きは親しみ易く、南吉が漢字表記に拘ったという話も聞かない。それにしても、「権狐」を「ゴンギツネ」と読むことは、昭和初期の人々といえども（まして子どもは）容易であったと思えない。児童雑誌「赤い鳥」へ投稿する意図があったのなら、ルビを振るといふ手があるにしても、南吉はなぜ始めから仮名表記にしなかったのだろう。同時期の彼の童話や童謡は、中国人の名である「張紅倫」は別として、「正坊とクロ」、「月から」、「星からきた人」（以上「赤い鳥」掲載）など平易な漢字を用いている。

本稿では、世に行われている『ごんぎつね』

は措き、「草稿」の「権狐」という標題の、とりわけ「権」について考えることによって、創作者としての少年南吉を眺めてみようと思う。

2 「権狐」という呼称についての諸説

「権狐」という名称の由来について、南吉は何も語っていない。しかし、地理的な関係や地元の伝承から2つの説が知られている。

まず、半田市中山地区にある権現山の名を採ったという「権現山の狐」説。これについて異聖歌は、次のように述べている。

「ごんぎつね」の原題は、ほんとうは「権狐」だった。「権現山の狐」を圧縮したものだろろうというのが、地元の人たちの意見だ。南吉の幼少年時には、権現山にも、ろっかん山（「和太郎さんと牛」）にも、鳥根山（「狐」）にも、いたるところに狐がいたのだ。『赤い鳥』では「ごん狐」になり、戦後の教育漢字には、「狐」がなくなったので、こうした大変化が起こっている。¹⁾

府川源一郎は、これと併せて「鐘つき池」にまつわる由来を紹介している。

実際、現地には、「ごんげん山の狐」の話が伝わっていた。「ごん狐」の舞台となった中山の丘の北三〇〇メートルに位置する権現山には、人家や山畑に出没した狐がい

たという。これを岩滑では「六蔵狐」と呼んだらしい。また、知多半島の中央の盆地にある大興寺村には「鐘つき池」という池があり、そこに夕風が吹き始めると池の底から「ゴーンゴーン」と鐘の音が聞こえ、村人はキツネが打つ鐘の音だと言い伝えていたという。そのキツネを”ごんぎつね”と呼んでいたという話を、南吉の友人であった中山文雄が書いている。²⁾

上記の見解は作者の生活環境と作品の舞台を踏まえた無理のないもので、首肯するほかはない。さて、これらを踏まえるとして、本作の内容が「権現山」といった固有名詞と不可分であるとは言えまい。つまり、作者には「権狐」という表記にこだわる必然性はない。現に、「赤い鳥」掲載にあたって、「ごん狐」の表記を受け入れている。「ごんぎつね」は、「ごん狐」と書いてもよく、「ゴンギツネ」と書いても問題はなかっただろう。では、なぜ南吉は草稿で「権狐」と表記したのか。

3 「権」という文字

この字は、手元の古語辞典では次のように説明されている。

①《「権」は仮の意》[官職を示す語の上に付いて] 正官に添えて設けた臨時の官を表す。後に、正官に準じる官を表す。②《①の意から転じて》ある地位の次の位であることを表す。第二の…。次の地位の…。準ずる…。³⁾

また、漢和辞典にも同様の説明がある。

①臨時に力だけをもったさま。また、正道によらず力に頼るさま。かりの。転じて、臨時の便法。⑦(日本)ゴン。律令制において、定員以外に臨時に任ずる官。後には、副官のように用いられた。⁴⁾

律令制下では、「権」は「ゴン」と読んで「仮の」という意味を表し、権大納言、権中納言を始めとして下位の官職にまで広く使われていた。「大宰権帥」は大宰府政を預かり、「帥」があれば置かれなかったが、次のような別種の任命もあった。

大臣が罪をうけたときは、権帥として大宰

府に遣わす例で、右大臣菅原道真、左大臣源高明、内大臣藤原伊周などが権帥となって流された類である。しかしながら、これらは、もとより罪人であるから、名義ばかりで府の事務をとることはなかったのである。⁵⁾

『大鏡』の、「左大臣は御年も若く、才も殊の外に劣りたまへるにより、右大臣の御覚え、殊の外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたるほどに、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ために善からぬ事出で来て、昌泰四年正月二十五日、大宰権帥になし奉りて、流されたまふ(時平伝)」⁶⁾という記述はよく知られている。

4 南吉の「権」理解

南吉の少年時代、わが国は、大正デモクラシーへの反動、関東大震災を契機とする国民精神の鼓吹、中学校での軍事教練必修化(大14)等を経て、満州事変(昭6)へと軍国・国粋に大きく傾いた。国語科は、古典を扱う性質上、下記のごとくその影響を受けざるを得なかった。

西尾実博士は、中等国語教材史における昭和4、5年から昭和12年頃にいたる期間を「国民生活表現中心期」と呼び、「前期が現代文学を中心としたのに対して、国民生活の表現を中心とするに至った」時期、即ち「文学性と国家性とを正しく定位した国語教材が選ばれるようになった」時期であるとす。換言すれば、この期が文学教材重視の時代から、国家主義的教材・古典教材中心へと移行した時期であることを意味する。⁷⁾

こうした時代にあつては、南吉が学んだ半田中学校で、例えば代表的古典「大鏡」が講じられていた可能性は極めて高かったはずだ。実際、昭和2年から18年までの37種の教科書の中で、「菅公の左遷(配流)」が19、道真関係全体が25、道真と道長を併せると32種の教科書に掲載されており、特に、昭和3年発行の5種類のうち、現代文の開成館を除く、至文堂、光風館、富山房、目黒書店の全てに道真(あるいは道真と道長)が採られている⁸⁾。

南吉が「大鏡」をどのように受容したかは不明であるが、道真・道長の記事を学んでいて「権」の意味を知らなかったとは考えられない。

また、昭和4年2月5日の、「明日は、文部省から、視学官が来るさうだ。で、六頁に亘る鍛工助弘伝（漢文）を調べて了った。」という日記の記述⁹⁾も興味深い。菊池三溪著「鍛工助弘伝」は、赤穂藩家臣小野寺十内の家僕が刀工となって主人の恥を雪ぐ話で、900字程の長さがある。これを1日で「調べた」（おそらく書き下した）のだから、かなりの学力である。「鍛工助弘伝」が教科書に採られていたかは定かでなく¹⁰⁾、副読本のようなものだったとも考えられる。この文章には、「直助権為其家僕、操作之暇、一意攻其業」という箇所があって、書き下すと、「直助権に其の家僕と為り、操作の暇、一意に其の業を攻む」となる¹¹⁾。ここでは、「権」の字が「仮に」の意で使われている。

つまり、南吉は「権」の意味を理解し、使うことができた。

彼の学力について巽聖歌は、「孤沙」の解説において、「当時の中学生には、漢文は正科であったけれども、こうした作品を書くまでの、教養をつけさせたかどうか、それは疑わしい。しかし、現に、南吉はこんな作品を書いている。」と言ひ、随筆「秋」から次の部分を紹介する。

支那には今から三千年前の、殷周の時代から書物があった。アラビヤ夜話の中にも、ゾーハンという学者が、毒のぬってある書物で、自分を殺した王に復讐した話がある。

（中略）字を知らない民族は、ほとんどない。字を知っている民族には、書がある。こう考えてみると、書というものは、空間的に時間的に、あらゆる所と時に存在しているのだ。だから我々は、あらゆる所と時の思想・風俗・出来ごとなどを、知ることが可能なわけだ（後略）

そして、「作品の内容よりも、まず、中学五年の彼の知性におどろくのである。」と評している¹²⁾。

5 自己意識—「正八」と「権」—

南吉の名、正八は「正八位」を連想させる。

正八位は、律令制において正一位から少初位下まで30段階ある位階の23（正八位上）または24（正八位下）番目に当たり、明治の太政官制では20段階中の15番目である。南吉の少年時代には、大正15年に発せられた「位階令」が浸透していたと思われる。

これによると、正八位は正一位から従八位までの16段階中15番目となる。下から2番目である。この位階に関わるエピソードが同級生によって伝えられている。

南吉の家でボヤを出した時、担任の先生が級友に、「正八が精神的にかなりまいっているようだからみんなも気をつけてやってくれ。」と言われました。それ以後、無口な彼がいつそう無口になったようです。その後、弁論大会で「火事の話」をしたことを覚えています。半中時代の恩師、遠藤慎一先生（県教育委員）は「わしの英文学が解るのは正八しかいない。」とよく話しておられた。むつつり屋の正八もたまには冗談をポツンといったものです。「おれは正八だからお稲荷さんには勝てないなあ。向こうは正一位なものなあ。」と言って級友を笑わせました。¹³⁾

ここにいう「ボヤ」は、昭和5年2月10日、「店」と呼んでいた母屋から100メートル以上隔たった「離れ」の風呂から出火したもので、離れは建て替えられたという¹⁴⁾。南吉が中学4年の時である。

このエピソードからは、「冗談」が成り立つほどに位階への認識は広がっていたこと、南吉が現在の自身を最下位に近い「正八位」であると卑下していたこと、しかし、同時に「正一位」の「お稲荷さん」を意識していたことがわかる。南吉の「冗談」は、現在の自分を「正八位」に見立て、遙かな高みへの憧憬を語ったものであったとも考えられる。

また、一般に位階の知識は官制の知識と一体であろう。「権」の使用が意識的であった可能性は低くない。

6 志と現実

南吉にとっての「正一位」、つまり彼の志は

何だったのか。下記は、「第二学年の終りにのぞみて」と題して新年度に向けての心境を語ったものである。健康に気をつけつつ、将来文章で立つために読書に励もうという意志が表明されている。

雑誌など読むと怒られますが三年になつてからも読む心算です、自分は只雑誌などが面白い為に読むではありません、と云ふと得手勝手な事を云ふ様ですが、本当は将来の為に読むのです、どうしても好い文を書くには沢山読まねば駄目です、

自分は斯ふ云ふ心を以て雑誌などを読むのですから、三年になつてから、親父がなんと云つたつて読みます、今よりより以上読みます、¹⁵⁾

この意志は持続し、「空想」とはいえ具体的な形を持つようになる。

空想の如何に長く、遅しかつたことよ！
……新聞広告欄に「家庭教師に雇はれたし」と求職し、東京の某金満家に雇はれ、早稲田大学予科に入り、文科を卒へて新聞記者になり、自分の作品を発表する——それから結婚、幸福——こんなはかない空想だ。父が「貴様は小学教員で了れば好い」と云つたからだ。「朝日」に投書した作品が入选しないかな。¹⁶⁾

そして、3年生を終える昭和4年3月2日には、壮大な気構えを見せる。

余の作品は、余の天性、性質と大きな理想を含んでゐる。

だから、これから多くの歴史が展開されて行つて、今から何百何千年後でも、若し余の作品が、認められるなら、余は、其処に再び生きる事が出来る。此の点に於て、余は実に幸福と云へる。¹⁷⁾

同年4月13日の記事は、彼の志を支えるものが何であるかを伺わせて面白い。

東京高等学校長塚原某と云ふ博士が来て、講堂で講演をした。すぢの無い講演だが、"空想するのは好い事だ"と云ふのと"何をやるにも熱がなくてはならん"と云ふのには同意した。¹⁸⁾

翌々日、ついに夢への端緒が開かれる。

愛誦五月号に、余の童謡「月夜」が入选し

てのつてみた。それを見つけた時、余の心臓は動かなくなつた。勿論、江口先生にお知らせしやう。¹⁹⁾

この年、彼の創作は童謡122、詩33、童話15に上つた²⁰⁾。先の昭和5年2月のエピソードは、こうした背景を持つものであつた。

南吉の文章力については、中学2年時に東大國文科を出て着任した江口彰次先生（彼が4年になると惟信高校へ転勤）が影響を与えたようである。次のようなインタビュー記事がある。

……これが「月と横笛」という作文の全文ですが、その末尾には、赤いインクのペンで、力強く「文才あり、想もいいやーだ、而しまだ冗長になる、そして力が抜けている、励むと君はいい文が書けるようになるから努力を惜しむな」と批判が書かれていますねえ。

とにかく、この文章を読んでもわかりますように、新美君は作文がうまなつた、そして、私の家へも、よく遊びにきた、この二つが私には、つよい印象として残っていますねえ。だから私も新美君を激励したし、又私なりに可愛うてやりましたねえ。²¹⁾

しかし、現実には過酷で、岡崎師範の入試に身体検査で失敗してしまう。

自分は何だか、今まで、自分の側にみた千賀が、遠くの方へあちらを向きつゝ行つて了つた様に思へた。そして、羨望と、さみしさが、ころがつて来た。²²⁾

中学を終え、小学校の代用教員となり、子どもたちにも愛情を感じるが、勉学を競つた友人たちへの羨望と挫折感は如何ともしがたい。

親しかつた友は、高等学校にはいつてしまつた。Mや、Kや——俺は、一日の殆んどを子供を相手にしてすごしてゐる。自分はおいてけぼりをくつた様にさみしい。²³⁾

しかし、その1ヶ月後の昭和6年5月7日、彼を有頂天にさせる知らせが舞い込む。

「コドモノクニ」に私の童謡「風」が特選にはいつた。名だけ出てみたが、何時か、発表してくれるだらう。うれしくて、眼がぼうとした。伊藤先生の奥さんにも見せて帰つた来た。

帰り途、自分は、天才の様に伊藤先生、奥

さんたちに思はれてるに違ひないと思つた。発表になつたら、松井や久米や、佐治先生や、遠藤先生に見せてやらうと思つてゐる。きつと彼等は、私を天才だと思つてくれるだらう。(中略)……私は、ぬすみ笑ひがしたい様にうれしかった。²⁴⁾

南吉は、自身の病弱と環境の不遇による絶望の念、そしてその対極に在る文学的才能への強烈な自信、この両者の間で激しく揺れ動いていた。

7 ゴンギツネ＝権狐の意味

鶴田清司は、『ごんぎつね』のモチーフを「人間の孤独と疎外」を見る。

ごんは、生来、身寄りがなく孤独であった。その寂しさを紛らわすために、いたずらばかりしたのだらう。そして、そのいたずらのせいで、兵十のお母にうなぎを食べさせられなかったとごんは思い込む。兵十がお母と死別して、ごんは自分と同じ境遇になったことを知る。どちらも孤独の身の上である。そこに限りない共感・共鳴が生まれて、<うなぎのつぐない>にとどまらず、兵十に思いを寄せるようになっていくのである。

一方、疎外という問題は、そうした同じような境遇にある立場であるにもかかわらず、言葉による意思疎通、コミュニケーションができないという状況のことである。本来なら、思いを分かち合うことができるはずなのに、人間と狐という対立的・敵対的な関係にあるためにそれができない。²⁵⁾

また、この作品を狐が人間に求愛する物語と見る北吉郎は、草稿「権狐」の冒頭部分に注目する。

その頃、中山から少し離れた山の中に、権狐と云ふ狐がゐました。権狐は、一人ぼっちの小さな狐で、いささぎの一ぱい繁った所に、洞を作って、その中に住んでゐました。²⁶⁾

北は、主人公が推敲の跡もなく「一人ぼっち」の「小さな狐」と設定されていることから、作者において「当初より明確なイメージが形成さ

れていた」と推定する。また、「いささぎの一ぱい繁った所」は、「中山」から少し離れた山中の、「樹木が繁茂し、人目につきにくい所を心象化している」とする。そして、「家」・「川<A>」・「狐」といった他作品を踏まえ、次のようにまとめた。

「一人ぼっち」には、単なる親兄弟の存在の有無にとどまらず、疎外された孤独なく異邦人>としての心象世界が投影されており、それは<住むべき家>も<住むべき村>も有しない<よそ者>としての自覚であり、この自己認識が人間との交流(求愛)物語において主人公像をケモノの狐と化して登場させている。したがって、権狐の「住む場所」には絶望の反映をうかがうことができる。この孤独と絶望の深さが、その反動としての結びつきを得ようとする激しさにつながっている。²⁷⁾

兵十への態度が孤独者同士の「共感・共鳴」なのか「求愛」なのかを、今判断することはできない。また、北が援用する他作品の主人公の心性が、「ごんぎつね」のそれと同じなのだろうかという疑問も残る。孤独や絶望は、生きる中で深まりもし、純化されもしただろうから。

それでも、これらの見解から最大公約数的に見出されるゴンギツネ像には納得できる。すなわち、キツネ社会・家族あるいは人間から疎外されて孤独であり、それゆえ他者とのつながりを求め、例えば兵十＝人間の気持ちを付度して「つぐない」もするが、結局人間には受け入れられない、そんな存在がゴンギツネであった。

そのようなゴンギツネは、人間と対立し、だましもする「一人前」のキツネ、人間と堂々と対峙する本物のキツネになり得なかった。まして、「正一位大明神」と畏敬される存在には遠かった。むしろ、人間に近い心性を見せもする、中途半端な「権」のキツネであった。

8 おわりに — 権狐と南吉 —

南吉は、物心ついた時から、病弱な身体、父の無理解、家族環境(継母)、恋愛の悩みといった「逆境」に取り巻かれていたと言われる。中学を優等で卒業したものの望む進路を得な

った代用教員時代は、そのような自分を将来に向けて総括する時でもあった。

かつて自らを「正八位」に位置づけた少年南吉は、現実と志の間で宙づりになっている現在への自覚の中で、「権狐」を書いた。才能を自覚し、しかもあるべき姿になり得ない「正八位」の自分を、「権」に過ぎないキツネに重ねて物語を紡いだのではなかったか。

「権狐」の成立は、南吉の教え子が教室で聴いたという証言に基づき、彼の代用教員時代²⁸⁾と言われてきた。これに対して北吉郎は、「文芸自由日記」に記述がない、内容に「明」（求愛の完結と希望）を反映した部分がある、求愛は9月に完結する、中央文学界につながりができる、作品の舞台が秋である、南吉は着想や構想があるとすぐ筆をとるの6点から、9月以降、10月4日（『スパルタノート』の「権狐」記載日）に近い日であった²⁹⁾と推定している。

代用教員時代に書いたのなら、（教員が不向きというのでなく、理想の姿に照らして）不本意な現実を見つめ、文によって立つ世界への離陸を期しての表出であっただろう。

北吉郎が言うように教職を退いた後、東京高師受験に向けての秋に書かれたとするなら、新世界へまさに飛び立つ助走期間に、宙づりの自分をあえて描き、訣別の結節点としたとも考えられる。

「権狐」という標題は、物語の展開（特に「赤い鳥」版「ごん狐」）に照らせば、「ごんぎつね」としても「ゴンギツネ」としても差し支えない。しかし、少年南吉にとっては、自身の現在のありようを言明する象徴としての意義を持っていたのではなかったか。

引用文献・注

- 1) 巽聖歌：『新美南吉十七歳の作品日記』（牧書店、1971）：日本図書センター『近代作家研究叢書141』（再刊）、20（1993）
- 2) 府川源一郎：『「ごんぎつね」をめぐる謎』、教育出版、21（2000）
- 3) 三角洋一他編：『最新全訳古語辞典』、東京書籍
- 4) 藤堂明保他編著：『漢字源』、学習研究社
- 5) 和田英松：『新訂官職要解』、講談社学術文庫、160（1983）

- 6) 石川徹校注：『大鏡』、新潮日本古典集成、66（1989）
- 7) 小林信郎他、教科書研究センター編：『旧制中等学校教科内容の変遷』、ぎょうせい、142（1984）
- 8) 田坂文穂編：『旧制中等教育国語科教科書内容索引』、教科書研究センター（1984）
- 9) 新美南吉：昭和四年自由日記、『校定新美南吉全集第十巻』、大日本図書、80（1981）
* 漢字は新字体に直した。以下の引用も同じ。
- 10) 8)『旧制中等教育国語科教科書内容索引』によれば、明治書院『新編中等国語読本』が「格言五則」として老子・荘子・荀子・文中子・王陽明を、京都金港堂『新制中学国文』が「故事三則」として「蒙求」を載せているし、「論語」は明治書院、至文堂、修文館の3社が採っている。が、漢文教材自体が非常に少ない。「漢文」の教科書を調べる機会があればと思う。
- 11) 「鍛工助弘伝」については、松本淳氏のウェブサイト「日本漢文の世界」によった。原典は、菊池三溪『奇文観止 本朝虞初新誌』巻上（明治16）。
- 12) 1)に同じ。57、58
- 13) 久松彦助：正八と南吉（河和在住の同級生の思い出）、『新美南吉と河和』、美浜町、14（1976）
- 14) 新美南吉記念館、遠山光嗣学芸員談（2011）
- 15) 新美南吉：作文草稿帳、『校定新美南吉全集第十巻』、大日本図書、44（1981）
- 16) 新美南吉：昭和四年自由日記、2月9日、『校定新美南吉全集第十巻』、大日本図書、81（1981）
- 17) 同上、91、92
- 18) 同上、109、19) 同上
- 20) 同上、12月31日、199
- 21) 神谷幸之：『南吉おぼえ書』、かみや美術館、480（1990）
- 22) 新美南吉：文芸自由日記、1931年4月3日、『校定新美南吉全集第十巻』、大日本図書、508（1981）
- 23) 同上、1931年4月7日、511
- 24) 同上、1931年5月7日、529
- 25) 鶴田清司：『なぜ日本人は「ごんぎつね」に惹かれるのか』、明拓出版、115、116（2005）
- 26) 新美南吉：スパルタノート、『校定新美南吉全集第十巻』、大日本図書、649、650（1981）
- 27) 北吉郎：『新美南吉「ごん狐」研究』、教育出版センター、143（1991）
- 28) 同上、16、29) 同上、17～20